

人の一生は重き荷を背負ふて遠き道をゆくが如し、急ぐ可からず。

が違ひますでな」それ客も敗は取るまじく息を續ませて「同じ花でも異境の外に咲いたのは、虎麁の眺めごさなり」と

「和舞臺まだ云やるな」
澤野は烈火の如し、れ年寄筆頭たる勢力も、た峯の顔に服せんぞ試みるなり

「道に違ふたこと何處までも申して」

り御前れた鹿のやうにいよは、政徳様
た鹿に髪を付け、た客を狙ふに構つた
顔にも似ぬ怖ろしい心、おぼせられ聞
かされませう。富貴絶世た乳の人をは
誑人だてございますや、た客を狙ふ
叛逆人あらせませうぞ」

「わい」それ峯は顔の色を暫む「あな
た御狂氣とござりますか、聞くも忌は
しいれ詞は豺迷惑に心得まする」

「相生ぞの、早うにの」
 「心得てござります、只今た役人衆へ
 ししとせ参ります」
 相生は密を頼へして、れ廣衆へ「取
 かんぞ、此時平伏したる顔と擔け
 、跪きたるまゝ、一尺餘も懸り出
 たるはれ容なり、花より紅く美しき
 唇を徐に開きて
 相生様、持たせられます」

賣家廣告
 一家屋數軒
 外に元日の出湯
 御用の御方は京坂本町裏通六八番戸
 藤井方へ
 諸官
 衙劍
 御は引

る確證を與へつゝある現在である、之

又ホーマリーの、オダグシーの中にはキ
リシヤ人、羅馬人の間にチャリオット
が盛んに行はれた時の事などが
歌つてある。然し将車が一般交通の利
便として廣く用ゐられる様になつたの
は、機械的新しなる事である。處が其中
飛車が出来、ア、ア、ア、といふと千
八百二十年に開通したといふストク
ホルムとディナークトの間及うの五年後に
開通したナグアブリアとマンチエス
といふとの短距離鐵道は、當時なかつた
といつてよ。最初は一時間四十
分、二十哩しか走らなかつたのが、五十
年許りの間に六十哩も走る様になつた
。一、二、三、の先はさうなることかも知
れぬ。手車も比較的新しきものである。
手車が自分で車を動かして進むといふ
は、アドラスだつたか、サレだつたか、前日
は失念したが、煙で羽根を作つて海を渡
つて、旗から逃げ出した、ううして高く
飛んではならぬと云ふ飛船のあつたに
も、さういふ、面白くもいふなら高い
處まで飛んだら太陽の熱で煙かきけて
海の面上へ落ちて死んで了つた。飛ん
で見たが、と何氣なく言ふ小供の言葉
の中に、飛行器發明の動機は含まれて
萌芽を發してゐた。

されば又いふ、近頃は米の空中に
は盛んに飛行器が飛んでゐる、先年英
京ロンドンで万国國際飛行器會議なん
といふ會が出来て其の危險な飛行法や
飛行の制定に就て盛んに熟慮した。獨逸
では「ウェンペル」が危大な飛行器を

要を認め、
日迄決行す

英雄豪傑は偉大なる人として活
る。聖人君子は小なる神として活
る。でもいふのはナラフ。
シーザーやナポレオンは前者で
ある。とすれば釋迦・クリストは後
者であるまいか。
前者は自ら活きながら爲りに他
者を救はす。後者は他を救ふが爲
に自ら救ふ。
前者は新たなもの、言葉を以て云へ
ば、我が救済主義である。後者は
我が自我主義である。儒学の所
謂折伏門、攝受門の見解即ち是
なり。前者は人を救ふに於て大なる
功を成す。後者は人を救ふに於て

10

の經濟雜誌。井上辰九郎博士の「東土の
墾闢、徒勞」田尻博士の「國債と地
米本唯三郎氏の『對清政策管見』と
米穀貿易の惡報」等の對清的政策あり
（東京市二條區瀨左衛門町
電話社）（第十一號）

時家庭新聞（六十號）號を這
き、整ひ家庭に於ける有益多
事以て充たす。（一都四健兒童
月刊）（丁目號）

世界（第一卷六號）戸田法學博
「取所改善の根本策」以取所
改善の根本策」

英雄首

擴張陳情書

既報
きた首を
と見わたる
▲そこで
も事に
大事成
成、お君
云つてあ
足らぬか
は韓政府
進歩する
路にも屢々
の事象に依る結果に可有之益來
の事情に依る地區の道路修築の
之が今日迄等閑に付置られて
良友、有様にして只東京城市
發展、根據地にして又東京市
密着する多町通の道路の修
交通運輸の諸般に於いては勿論
餘なく、一層整備される所とし

擴張陳情會にて幹事長幹事の
氏長、右首室氏に提出せし
擴張に關する陳情書の全文大

性意なき
つてこそ

召使れ初 黒法師
第百十二回



「そりや什麼ぢや」
「なるなれた口から御意順風をた吹か
さるなりとござります、却年ハ懸隔
ござりませうと、様々は御本服、
方御所生をさりますぞ」
「やゝつてこべを聞きたうもない、
は借り物、假へ誰さされた生れてであ
るも様々は御前様、御前様服に
違ないわい」と深澤は口早に云ひ切
つて、それで御前様、御前様服でな
い、と云ふやうな文を述べた身の上
を以てでもあると云ふやうか」
「疑相もない、左様な事什麼として
やゝ／＼どうぢや、富貴姫様はか
へ申し上げ参りませうかな」
「御大様や令方にうと頼みます」
「野はこれ様を暫く目かけ、取極なた方
奥向に左置き申すは、御元氣な
袍と小供の手に置くも同じと、た
危うござります、富貴姫様爲にも
おさうござります」
「お家が何と云はんとするを、深
澤一派の女中其は、被せかけ、
及深澤一派の女中其は、被せかけ、
云ひ参りて、お家は口を開かせと
するなり、お家は口を開かせとす
るの中に、富貴姫様は侍女を
抱かれて、この前様仕度となるら
ん、おさうと云ふ」

天！

[illegible]

ニサア・ロポッサ
ンヘンミ
レービ

廣告

女をの居を合せたると夢にだも知らず
 し彼等の目には突如として聲をか
 突如として姿を見せたるれ終は、天
 降りに如にも見ゆ、又地より湧
 るやうにも感じられ、されど漂
 流石に沈着きて
 そなけ誰ぢや、遂に見の女、何と
 此處へは來た、うなたなど入る處
 控ね」へと頭ごなしなり

へるはた察なり、花より紅く美し
 を徐に開きて
 相生様、待たせられませ」
 野相生を初めとして、其處に居
 へ女中侍女は、この意外の様を目
 反逆るばかりに驚きぬ、斯る處に

相生をの、早うにの」
心得てござります、只今、れ役人衆、
しつけ参ります」
相生は裾を翻へして、れ廣敷へ駈
かんとす、此時平伏したる顔と體

東京芝區愛宕下町二ノ五(日條町) 林軍刀店

瓦斯コークス販賣
京城黄金町赤澤酒館

並に 屬品

取店商
大

海陸軍刀

諾官 荷劍

勉強 調製

御用は引
商人納
並に兵
に製造

賣家廣告
一家屋數軒
外に元日の出湯（建物全部）
御用の御方は京城北本町裏通六八番目
藤井方へ

城京藝妓の半生
松葉亭の時松
(五)

妙な目的からの方であつた。三蔵法師は香をばらまいたのであるで出立前の脚聲當はマルでつて初めは厭々食へぬ京水の御飯何うやらに見放され相な暮色になつたが、農商部から出張に上居られた買入や出品人、總代の京都の治兵衛・善んなどと筆頭在留の日本人は元より見物に侵入した日本の紳達が此の境遇で大變同情を寄せて下つて度々慰問に来て下さる中、

今考へても餘りの情なさに涙が出ま
 したかぬ、興行の方は日が經つに
 益々入從つて收入がないので
 冷遇は虐待と變つて來
 ました。

いってんで逃亡を企てた人があ
りました、勿論目的は果しませんでし
ましたが、病氣に罹つて死
ましたよ、其の人から見れば妻なぞ
マア社合の方でしようと思つて居ま
すがね兎に角例にしても何處へ行かう
分不相當の收入があるの身分不相

乗るものではありません。乗れば必ず
新うした破目に打つ突るのです。王
物譲りしたく長々米國の話をなさ
此の手に離られん如にどの考へから
すワ、エ、夫れがホントの老嫗心だ
可愛相う三十歳には間のあるもの

「さう、私なんぞはセントルイスに打つて云ふ丈で只留と博覧會への道筋ばかり知らなせんで、恰度四人一歩も門外へ踏み出さないんですからね。馬車から馬車から船と云ふ下す米國の土へと踏よんと云つて貴位です。貴位に打つた如きのやうな奴は、皇座へ歸る

山樓さんろうから駒榮こゑと名乗つて現はれ
次第ですが、駒存こゑじの大酒おほいさけにレツナル
此これですわ、其そのの方かたのれ客きやくは、御座ござい

が四十年、竹田津君、心變も
及んで、奥様、れ迎へなすつ
四海波靜かに、時津風枝も、
つたが、結まらぬのは、胸、
せぬ三年さへ、と、電話
露骨、呼出しを掛ける、夫れ
も、不可なり、と、奥様、電話口に立たし、
怒みの百重階、と、轉、三人を、
には、ス、カ、閉口して、遂に、人を、使

入れて仁川退去を命じた。退去料の附いた事は勿論なりで四十年七月今の家へ転替へにこそ及んだのであるからモウ云ひ分は無い筈だが平君の弱身に附け込んし時々無心を吹き掛ける、不可ん、ぞ

るが此れが又面白いのだ、と云ふの
 近日花嫁御が見ゆるんぞ

此の頃の藝妓は十六歳と守袋に書いてある程ありて、桁外れの俳優買ひなう

てゐる殊勝らしいを見習はうと我慢
 事か不慮見にも数回心を發露したゝ
 南山町一丁目水屋會飲食店の増尾方
 一團はもと云ふ三十五五の年増
 の女は以前舞臺棲りの他の料理店に
 居る姿でして、こゝにも顔を出してゐ

女は金にうつつをぬかし、髪を剃り、
の下女に擇田つわと云ひ、縫縫の問題
漸く帯の幅の廣いのと頭髮の長いの
で判らうと云ふ心細い奴あり、はな
水及料理などと注文に應じて持ち上

本、さういふ召格一様、板(十四圓)出、孰れも之れを入賃しはるは職、
 上、板に下廻りを本町一目下の葛、
 葛、館に喰へ込んで一念を晴して、
 物で役者を買ふとは現代的だわね、
 をなほにない事を仕ながら、街を、
 いし居たが此の程探知されて御用、
 たりたり、聞けり前記の兩人は孰れ、
 科数犯の曲物などか

●彼は斯うし罪を重
 〆つたれなる密盜前科
 島根縣那賀郡上府村生千代延藏吉
 島根縣長崎監獄に於て持兇器
 犯にて懲役六年に處せられ服役中
 十一月六日假出獄の恩典を受け郷
 て移業に従事せしも世人に密盜前

●北海道から遙々
△可愛い男に意地を立
二十四日仁川入港の信濃川丸にても
も上陸せんとする二人連れの男女

しき敷敷に水上梨の石川遺者が不
抱き歌讀べて見るゝ鮎客名簿に
蘇黒川郡吉岡町佐藤長八（八二）同
みね（二）とありしは眞名にして此
原籍は徳島縣名西郡大井町生れ本
石悦五郎（二）にて明治二十一年頃
北海道釧路足寄郡陸別村分郷に移
たる者に二兩親あり妻子ある身に

屋敷の奥學士藤又一氏に預けられ、藤氏
 營にかゝる。數万丁歩の士地附拓及び
 美濃、近江等に從事し居り悦五郎は
 小才の利きたる男として専ら關氏の
 之を得つゝありなれば傍ら伐木事業
 に於て地味材及マツチの類等の諸
 業を爲したるも不馴れのため美濃生
 けは、以て關氏に對し大の損を

ひ(三)を招き新く此の事情を打明

前へ
 松、園
 の願を
 信、松、園
 南高、北門、洞、河、留、學、慶、館、は、四、十、四、月、一、日、日、本、へ、留、學、し、東、京、市、總、町、三、丁、目、二、十、番、目、下、宿、手、嫁、方、に、止、留、中、下、女、兩、人、婿、主、縣、北、埼玉、ヶ、谷、村、新、井、又、々、村、女、婿、め、し、ゆ、く、保、ろ、と、な、り、夫、婦、約、束、し、ゆ、う、姓、と、な、り、四、二、年、五、月、分、鏡、せ、し、ま、慶、館、も、大、に、喜、び、陳、謝、禮、と、命、名、し、し、

事にして結局近々に渡す可しと歸郷したる徳扶養科を送付せし爲う他に嫁する譯にも行かず財政として父又次郎より其筋に向け陳謝對一説論方面にて顯出たるよりしたるに陳謝は恐縮して是より

●**仁赤痢患者續發**
川花町二丁目招葉より、是よりは本月
日曜より子宮病なりとて佐藤病院
に入院せられたりしが、一昨二十四日午
に、急に急に赤痢を患へ、急に急に血便を
出され、急に急に衰弱を來せられたり、
治癒の診察により疑ひ赤痢に罹り

事利明し早速遷病院に收容せり
 邸上吾丁里四統五戸高致吾の三男
 男(一)同里二統六戸白仲兆(二)同
 統四戸尹昌達の三男尹太順(三)は
 四日醫士の診驗により赤痢患者と
 隔離したり

●傳染病續發
 本年一月以

陽室扶桑四十一人赤痢二十六人實
強七人我紅痢三人瘧瘧一人に
月六人二月八人三月一人四月一人
五人六月三十人而して七月は去る
三日迄に既に三十七人の患者にて
五六人の申出ありて時節摘各目十
注書附要なり

不詳李召見。已去。六月六日仁
所。水洞除雲仙方に忍入り異鎗製食器
ね。四個代金十二圓相當の品を窃取せ
た。手初めに同月十九日調製養方

●樂は苦のたね 仁川島島報
島棲地菴妓仙島市中村かつしは
三日の夜花舞外二丁目梅本つしは
樂しきも無舞外、出仕出と云ふ方
ツツイと藝舞へ△仁川京町二丁目
店山口かつ方醇餅重松しなもは
食で、△同夜三時、望賢園一
舞で、舞中を、取押し、拘留處
山口かつは、西崎倉藏を、宿泊せしめ
と、以て罰金一圓、第一、數島棲の若
下の方、及、同棲、生落下とし、二

るしゆの難に於ては、**仁川の海水浴場** 諸般の設備を備へ、完成したる同遊園地式は二十三日に於て、男女を分ち萬一に救助網を張り繞らしたり、出所、三福のすしや等あり、浴に當ては餘興として水泳競争なりて歌舞伎座見物と洒落て居たり

久水府尹 同令鑓、和田觀測所長
官公吏等なり。師場は毎日午前七
時半七時迄、夜は電燈要所ノ
燈くべければ涼みがてら、定めし各
人出を見るべし

●本願寺の佛教講話 南山
寺別院にては、本山特派有教使平松

[illegible]


的
 一
 月
 十
 日
 決
 以
 決
 現
 場
 を
 市
 部
 署
 に
 檢
 査
 せ
 れ
 各
 科
 科
 長
 に
 即
 決
 せ
 ば
 可
 也
 當
 時
 本
 町
 一
 丁
 目
 裏
 通
 り
 谷
 口
 義
 雄
 三
 名
 は
 二
 十
 四
 日
 午
 後
 十
 一
 時
 半
 頃
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲
 役
 に
 身
 振
 り
 は
 拘
 束
 な
 か
 り
 し
 て
 出
 發
 せ
 る
 所
 出
 松
 太
 郎
 氏
 の
 新
 聞
 規
 則
 違
 犯
 は
 一
 年
 の
 懲

●歌舞伎座の喜劇 大坂
●演藝だより
●名信濃義経半小半一座の二輪
●及び曾我家一派新喜劇合同にて

御十猫
 何れも青島上の打撃一方ならず各
 事なきが殊に可愛相様は入院
 御十猫
 何れも青島上の打撃一方ならず各
 事なきが殊に可愛相様は入院
 御十猫
 何れも青島上の打撃一方ならず各
 事なきが殊に可愛相様は入院

想ひて樂むのみ然るに一度入院は増
 ば其上の借金のかせに年期は増
 にて入院は彼妓等の最も服ふ所
 一度入院の命に挂するや顔色を
 人として泣かぬ妓はない。天命
 等の心情を想ひ遣れば同情の念
 ▲第一權支店の名花吉野大夫に

進に根引きせられ玉垣の内に移
 れ主より外には指も指さぬ身
 たるも前配の妓共説に替へて
 マンの好い妓なる哉▲第一様本
 今春現れたる小娘(三)は麗



酒

南山の松吹く風の昔にも其名
 られ今は通人間の野村技▲これ
 種藝技にて光景棟の静子(三)は
 極業には珍らしい心懸けの好い女
 過ぎたる頃より旭町の女子技藝
 日々通學なし裁縫の精より餘念
 なるが頃目にては夜毎に圓ふ
 余よりも裁縫の手の方が餘程上

たる由▲去日の本欄にて井門の物
松を賣らねからなむと大勢君を
いたせ男子と申す方は本通りで
れたる色男子少々春が低く肥
る所が全然で豚の様だと鶴白
れた化けの精しと其れでよ
名たる由た惨気の吹聴もつけ
上観望であつたのには御注意な

手繰手繰もなし野暮らしくて素
て有らざと所を見込んでか可愛相な
之の居惚れてゐる方がそんじよ其處邊
二十どの事(箒之助)

[illegible]

